

母子関係の形成—青年前期の発達課題と現在の自己評価

伊藤 榮子*

Development of Mother-Child Relation: On Early Adolescence and Present Self-esteem

Eiko ITOU

要旨

本研究の目的は、短大学生が職業につく前のレディネスを把握するために、発達上の特性と現在の自己評価の関係性を調べることである。3つのカテゴリー（家庭・学校・社会の生活）と自己評価の質問を149人の看護短大生に行った。その結果、自己評価において肯定の回答をした31人は中学校、高等学校の先生の話をよく聴いていた、重要な決定に際しては親の意見を尊重したことが明確になった。また、否定の回答をした13人の回答者はそうでなかったことを示した。上記の13人は現在、他人に共感を感じる余裕がないことも示した。

キーワード：自己評価、職業のレディネス、共感性

Summary : The purpose of this study is to investigate the relationship between developmental characteristics, self-esteem, and to observe the readiness of junior college students before engaging in the profession. Pertinent demographic questions of three categories (home, school, social life) and self-esteem were given to 149 nursing junior college students. The results indicated that 31 of the participants who answered in the affirmative for self-esteem had been listening to their teachers attentively in their junior and senior high school years and also respected their parents' opinion in making a critical decision. 13 of the participants who answered in the negative did not show the same characteristics. It did however show that these 13 participants did feel sympathy towards others.

Key words : self-esteem, readiness for the profession, sympathy to others

はじめに

看護学生には実習自体に適応できなくて多くの助言を必要とする人、その段階で挫折した人がいた。彼らが将来直面するケアの場面では「冷静な行動」と「人に対する思いやり」などが必要である。教育課程における達成結果はその評価でみることができる。人格形成の部分では現在に至る過去の部分が見えにくい。冷静な行動の裏側には他人への思いやり（共感）、自己抑制などがある。

それらは、現在に至る過去において形成された部分であり、ケアの場面の冷静な行動を支える見えない部分と思われる。ここではその部分を、学生が進路を決定する15歳から17歳頃まで家庭・学校・社会生活においてはどのような傾向の行動をしていたか、また、現在の自分の人格的側面をどう評価しているかの2つの面から明らかにしたい。それと同時に、その原点はどういうことなのかを推測することは、今後の教育に役立つと思われる。

* 母性看護学教授

I. 職業選択時期の発達課題の調査と自己評価

バーバラ／フィリップ・ニューマン（福富訳、1998）は、青年後期（18～22歳）に職業選択の発達課題を設定している。その課題を獲得するためには、それ以前に獲得することが望ましい発達課題がある。各時期に獲得しない課題を後に再び獲得しようとするれば、極めて多くの困難を伴い、それを克服するには多大の努力がいるからである。このような観点から、本調査では、青年後期以前に獲得することが望ましい発達課題は、現在の人格的特性に組み込まれているという前提で行なう。ニューマンによる発達時期と発達課題は概ね次のようになる（乳児期は除く）。

①歩行期（2～4歳）の課題

忍耐力、環境コントロール（自分の感情や主張などで周囲（環境）を自分の思いどおりにさせること）と、セルフ・コントロール（自己抑制／我慢）を学ぶ。

②学童前期（5～7歳）の課題

道徳的判断・行為、共感性（思いやり）と罪意識（良心）の獲得

③学童中期（8～12歳）の課題

何よりも先ず「勤勉さ」を獲得すること。勤勉さの概念には「能力を磨き上げて（努力して）、有意味な仕事を遂行しようとする熱意」が含まれており、「価値感覚や責任感」をもたらし、他との能力差を悟り恥と劣等感を味わい、それを克服するための忍耐力も培う。

④青年前期（13～17歳）の課題

この時期の主な課題の重要なことには「情動に対する耐性」を作り上げることと職業選択のレディネスの獲得がある。この時期の課題は、心身の急激な発達と共に多岐にわたっている。それらは価値やイデオロギーへの忠誠を維持する能力を得る、役割要求（例えば学生としての役割と友人としての役割など）の不一致の対処のバランスのとり方等を学ぶ、美術・人文科学・社会のあり方（知識）が創造的概念を育むことを学ぶ、新たな解決法を生み出し現在の挑戦に当てる能力を持つ、問題解決への期待に対する圧力への対処、集団や状況による価値の受容／拒否（価値の相対性）を学ぶ、問題解決過程を客観的に見て自分の能力を考えながら対応することを学ぶなどがある。

⑤青年後期（18～22歳）の課題

両親からの自立、道徳の内在化、職業選択など

II. 研究方法

上記の青年前期（13～17歳）の課題については、家庭・学校・社会生活の調査項目との関わりを検討する必要がある。これらの多様な課題に適切な調査項目を設定することはむずかしいが、友人関係の情報、活動の観察、科目成績、報告書のチェックなどにより、ある程度まで推測可能である。また、青年前期の課題である「情動に対する耐性」の情動は欲望と言い換えることもできる。調査対象は、20～21歳で、青年後期（18～22歳）の発達時期の最終段階に至っていないが、調査内容は青年後期の課題とした。

ここでは青年後期の発達課題を、上記の各期から抽出し進路・職業選択期の人格的特性をレディネスと捉えた。従って、「忍耐力、共感性と罪意識、勤勉、情動・誘惑に対する抵抗、道徳の内在化、両親からの自立、職業選択」などを人格的特性とする。

1. 目的

本研究の目的は、調査対象の職業選択のレディネスを把握するために、家庭・学校・社会生活の要素と「青年後期」の現在の人格的特性（自己評価）との関係を探る。

2. 調査方法

上記の発達の各期から抽出した課題は、進路・職業選択に至る人格的レディネスと考えて、そのレディネスの要素として20項目を設定した。また、その獲得状況を把握する自己評価を行なった（注1）。

課題獲得の具体的な調査内容は、家庭生活、学校生活、社会生活における行動の項目を用いた。

(1) 質問紙によるアンケート調査

アンケート調査「15歳～17歳（中3～高2）頃の思いで／現在のあなた自身について」は家庭・学校・社会生活と、上記レディネスの人格的特性の自己評価を行った（表1）。調査の「中3～高2頃」は青年前期（13～18歳）と重なった。

「現在のあなた自身について」の自己評価は青年後期（18～22歳）の課題（両親からの自立、道徳の内在化、職業選択など）の評価も含む。調査対象は青年後期のさ中の発展途上にあるが、課題獲得については青年後期とした。

調査対象は、フェース・シート（家庭環境等）を記入し、(I) 家庭生活の項目（1～18）、

(Ⅱ) 学校生活の項目 (19~34)、(Ⅲ) 社会生活の項目 (35~42) に、「はい」、「いいえ」、「どちらとも言えない」で回答した。(Ⅳ) は現在の人格的特性の自己評価であり、進路・職業選択に至る人格的レディネスを示す要素の20項目からなる。ここでは1~8は「どちらかと言えば好ましい」と判断できる項目、16~20は「どちらかと言えば好ましくない」と判断できる5項目とした(基準設定)。その中間には「好ましい/好ましくない」の両方への発達可能な9~15の「どちらとも言えない」(7項目)を設けた(次章(1)を参照)。回答は、現在の自分に最も近い7項目を選択するように設定した。

(2) 調査対象

調査対象は看護学生で有効回答数149人(89.0%)

(3) 調査期間 2005年4月22日

(4) 倫理的配慮

調査時には調査結果は学術研究のみに用い、調査は強制的でないこと、個人の私権は侵害されないこと等を文書と口頭で説明し、回答してもよい場合だけ回答するよう協力を依頼した。

Ⅲ. 結果と分析

調査結果についての分析は、主として青年後期における人格的にどちらかと言えば「好ましい」特性の項目(1~8)と、「好ましくない」特性(16~20)に視点をあてて行う。それぞれの調査対象の傾向は次のとおりである。

1. 人格的特性(現在の自己評価)

(1) どちらかと言えば「好ましい人格的特性」

の項目(各項目:N=149)

- ①「1. 自分の理想を実現のために努力する」
59.7% (89名)
- ②「8. 他人を思いやる優しい気持ちがある」
53.4% (80名)
- ③「6. 他人の反対意見を聞く余裕がある」
53.0% (79名)
- ④「2. 社会一般の規制・倫理・道徳を守ろうとする」
51.0% (76名)
- ⑤「5. 将来のことを十分考えて行動できる」
38.3% (57名)
- ⑥「7. 議論をする時は感情的になることが少ない」
25.5% (38名)
- ⑦「4. 臨機応変に対応できる」19.5% (29名)
- ⑧「3. 自分の義務も果たし自己主張もする」

16.8% (25名)

上記①~④は、調査対象の50%を超えている。それらは職業選択に至る青年後期でも「好ましい」課題であり、「理想実現の努力・他人を思いやる優しい気持/他人の反対意見を聞く余裕・自己抑制・倫理・道徳を守る」という人格的特性といえる。その他の人格的特性の項目については「発達途上にある」と見ることができる。

上記の項目は「自分の理想を実現するために努力する・社会一般の規制・倫理・道徳を守ろうとする・将来のことを十分考えて行動できる・自分の義務も果たし自己主張もする・臨機応変に対応できる・将来のことを十分考えて行動できる・他人の反対意見を聞く余裕がある・議論をする時は感情的になることが少ない・他人を思いやる優しい気持ちがある」である。大人として、また、看護系の仕事に携わる人には特に望ましい、これらの「好ましい特性」を持つ集団は、現段階では少なくとも過半数の「3~4つ以上を持つべきだ」という規準を設けた。

「どちらかと言えば好ましい」人格的特性の項目では、「6. 他人の反対意見を聞く余裕がある」ので「7. 議論をする時は感情的になることが少ない」と考えることができる。この2つの項目は人格的には他人に対する「許容/寛容」の行為と見ることができるので、前記の「3~4つ以上」の基準は「1・8・6」又は「1・8・6・7」も考慮して設定した。

(2) どちらかと言えば「好ましくない人格的特性」(各項目:N=149)

- ①「16. 人前では遠慮して消極的になる」
40.3% (60名)
- ②「17. 欲しいものはどうしても手に入れたいと思う」
21.5% (32名)
- ③「18. 苛立ったり怒ったりする機会が多い」
17.4% (26名)
- ④「20. 無意識に他人を厳しく批判する機会がある」
16.1% (24名)
- ⑤「19. 他人や親の責任を強く追求する方である」
5.4% (8名)

上記①~⑤を要約すると、全調査対象の4割程は「人前では遠慮して消極的(又は内向的)」と回答している。また、2割前後は「欲しい物はどうしても手に入れたい・苛立ち怒る傾向・他人や親の責任を迫及する方・無意識に他人を厳しく批判する傾向」の人格的特性を選んでいる。これら

は職業的レディネスとしては好ましくなく、ここでは16・17・18の特性のうち「2つ(61.8%)～3つ(79.2%)を有する者」という規準を設定し、この規準は、どちらかと言えば「好ましくない人格的特性抽出規準」とした。この規準による集団を検討対象とする。

(3) 上記2つの分析の視点以外の調査対象

上記以外の「どちらとも言えない」範囲に含まれる中間層(人格的特性調査でどちらかと言えば「好ましい」特性の項目が2つ以下、どちらかと言えば「好ましくない」人格的特性の項目が1つ又は0)の集団(105人)である。この中間層については今後「どちらかと言えば好ましい」集団に移行することが望まれる。「自分の可能性をできるだけ実現しようと試みるのが“人間の本質”であり、人は基本的に有能であり、自己実現には積極的に努力する」とA. H. マズローが言っている(注2)。その推移については稿を改めて確かめたい。

2. 「好ましい/好ましくない」集団の青年前期(思い出)の「家庭・学校・社会生活」

青年前期(思い出)の「家庭・学校・社会生活」については、どちらかと言えば「好ましい人格的特性」を3つ以上持つ集団と、どちらかと言えば「好ましくない人格的特性」を2つ以上持つ集団を抜き出した。

次に、人格的な発達課題「職業選択」に特に深く関わり、具体的に重なると考えられる項目を、

「(I) 家庭・(II) 学校・(III) 社会生活」から抽出すると、それらは次のようになる(カッコ内は表1の調査項目の番号である)。

- (1) 家庭生活に深く関わる青年前期の内容— 家族への配慮と協力・自己責任など・自立などの調査項目(6、7、8)
- (2) 学校生活に深く関わる青年前期の内容— 自分の将来の見通し・勤勉性・努力の習慣形成などの調査項目(20、27、29、30、32、33)
- (3) 社会生活に深く関わる青年前期の内容— 積極的な対人関係、社会の秩序、法律・規則の遵守などの項目(37、42)

抽出したそれらの項目は「家族への配慮と協力・自己責任」、「自分の将来の見通し・勤勉性・努力の習慣形成」、「積極的な対人関係」等となる。その抽出した項目を、どちらかと言えば「好ましい人格的特性」集団と、どちらかと言えば「好ましくない人格的特性」集団に分けて以下のように併記した。また、「どちらとも言えない」範囲に含まれる中間層については、人格的特性(現在の自己評価)と同じ扱いをし、稿を改めて。

3. 現在の自己評価から見た青年前期の家庭・学校・社会生活の比較

(A) どちらかと言えば「好ましい人格的特性」項目を3個以上持つ集団と、(B) どちらかと言えば「好ましくない人格的特性」を2個以上持つ集団を比較すると次のようになる。

「青年前期の家庭・学校・社会生活のAとBの比較表」
 <質問文は略記、(A) N=31、(B) N=13、数字は%>

(抽出した関連項目)	(A)	(B)
①現在の自己評価		
1. 自分の理想を実現するために努力する	100	53.8
6. 他人の反対意見を聞く余裕がある	93.5	38.5
7. 議論をする時は感情的になることが少ない	38.7	30.8
8. 他人を思いやる優しい気持ちがある	100	0
< AとBには有意差が見られた (p=0.0348) >		
②家庭生活		
6. 自分の行動は父に相談して決めた	13	23.1
7. 自分の行動は母に相談して決めた	64.5	69.2
8. 家族の人間関係・事情を理解して行動した	77.4	69.2
< AとBには有意差が見られない (p=0.362) >		
③学校生活		
20. 分からないことは先生によく聞きに行った	51.6	38.5

27. 先生の教えはよく聞いた	80.6	46.2
29. 難しい内容でも勉強には興味があった	32.3	30.8
30. 苦手な科目は集中的に勉強した	35.5	30.8
32. 重大な決定は親の意見を尊重した	74.2	53.8
33. 自分の進路決定には先生の意見を参考にした	61.3	61.5

< AとBには有意差は見られた ($p=0.0363$) >

④社会生活

37. 社会の決まりは守る方であった	96.8	84.6
42. 将来進む方向は大体決めていた	83.9	53.8

< AとBには有意差が見られない ($p=0.1274$) >

上記の集団で有意差が見られたのは「現在の自己評価」と「学校生活」の項目である。「社会生活」において、青年前期は高校進学と大学進学などへの進路決定で揺れ動く心情を反映していると考えられる。

IV. 調査結果の考察

本研究では、調査対象の職業選択のレディネスを把握するために、ニューマンが設定した青年後期(18~22歳)の職業選択の発達課題をそのレディネスと見て、その獲得については「自己評価」で調べた。また、進路決定の方向を見定める節目にある青年前期(13~17歳頃)の「家庭・学校・社会生活」との関わりで、その裏付けを試みた。看護学生として要求されるべき「どちらかと言えば好ましい」レディネスとしての人格的特性を持つ集団と、「どちらかと言えば好ましくない」レディネスとしての人格的特性を持つ集団の違いを追跡した結果、有意差が見られたのは「現在の自己評価」と「学校生活」の項目である。そのため、ここでは「好ましい」集団と「好ましくない」集団の「学校生活」と「人格的特性」の関係について考察する。

1. 学校生活から見た発達について

前章の分析の結果、学校生活の項目で最も大きな違いは、「分からないことは先生によく聞きに行った」、「先生の教えはよく聞いた」、「重大な決定は親の意見を尊重した」であり、その他の項目は大きな差はない。

これらに関わる発達課題獲得の自己評価は、端的に言えば「理想実現のため努力する」、「他人の反対意見を聞く余裕がある」、「他人を思いやる優しい気持ちがある」である。

学校生活では、好ましい人格的特性の集団は学習に対する態度・姿勢、すなわち、「分からない

ことは先生によく聞きに行った」者は半数、「先生の教えはよく聞いた」者は8割ほど、「重大な決定は親の意見を尊重した」者は7割強であった。

「好ましい」人格的特性の集団は「他人の意見に耳を傾ける」態度、積極的な姿勢(聞きに行く)が際立っていたと言える。また、好ましくない人格的特性の集団は「これらの点で全て下まわっている」ことである。これは言い換えれば、ニューマンが言う「勤勉性」(学童中期、8~12歳の課題)獲得の違いを示していると考えられる。この両集団の勤勉性の獲得の違いの原因はそれ以前に獲得する「環境制御と自己抑制/我慢」の均衡(歩行期、2~4歳の課題)にあるという推測が可能である。この推測は、環境コントロール(自分の感情や主張などで周囲(環境)を自分の思いどおりにさせること)と、セルフ・コントロール(自己抑制)のバランスのとり方を学んでいたかどうかによるものである。忍耐力に関わる学習の態度・姿勢において「好ましい」集団には問題はなかったが、「好ましくない」集団には問題とすべき部分があったと言えよう。そのことは青年前期(本調査の中学~高校段階)における問題だったとしても、現在でもそれが「好ましい」方向に変化していなければ、問題は依然として残っていることになる。

ニューマンは、教育は勤勉さの発達に影響を与える重要な過程であり、勤勉は勉強に向かう積極性と技能習得に対する自信である、という趣旨の内容を述べている。¹⁾ 環境コントロールの方が自己抑制より大であれば、勤勉さの発達に重要な影響を与える教育を阻害する要因となると考えられる。この状況は、基本的には概略を次のように図示することができ、出発点は歩行期(2~4歳・家庭生活)にあり、伝統的な子育て文化では「母子関係」の中で始まると言えよう。

<図式1「学校生活から見た発達」>

(歩行期) → (小2-6年) — (推測) —> (青年前期の学校生活)

- A: 自己抑制 → 勤勉性高い → (学習活動に適応) → 人の話に耳を傾けた (協調性)
B: 環境抑制 → 勤勉性低い → (学習阻害) → 人の話を聴かない傾向があった

2. 発達課題と人格的特性 (自己評価) について

「好ましい」集団の人格的特性は「殆どの者は理想実現に努力する、他人の反対意見を聞く余裕がある、他人を思いやる優しい気持ちがある」という傾向を持っている。また、「好ましくない」集団の人格的特性は、「好ましい」集団のそれらの「半数又はそれ以下で、共感性は全くない」ということを示している。「好ましい」集団はA. H. マズローが言うように自分の可能性をできるだけ実現しようと試みるのが“人間の本質”であり、人は基本的に有能であり、自己実現(夢、理想実現)には積極的に努力する(注2)。「好ましくない」集団の「理想実現に努力する」は半数で、平均すると3割程度になる。「他人を思いやる気持ち」はゼロである。

共感性は思いやりで、これについては、例えば、①「電車で席を譲らなければいけない(道徳の知識やマナーとしての行動)」、②「立っているのはつらいだろうな(相手の感情を察して思いやる)」、席を譲らないで③「悪いことをしてしまった後ろめたさから(罪悪感)を感じる」、④「全く何も感じない(罪悪感の可能性さえない)」人がいる。本当の「思いやり」は相手の感情を察して思いやることだと山口は言う。²⁾ 両集団の対象はこの分け方の何れかであろう。

「他人の反対意見を聞く余裕がある」ことは「他人を思いやる優しい気持ちがある」ことと連動している。「他人を思いやる気持ち」はゼロというのは「全く何も感じない(罪悪感の可能性さえない)」人と解釈されてもやむを得ない。

デイヴィッド/アン・プレマックは『自分の欲求と所属する集団の欲求の両方を満たすこと、これが道徳にとっての鍵となる問題である。極度の

社会的動物であるヒトは絶えず道徳の問題に直面する。ヒトは自らに(自己抑制→勤勉性等の道徳律を)「教える」モジュールをもっていないし、おそらくそうしたモジュールをもつこともなさそうである。というのは、道徳は言語や数のような、ひとつのまとまったものごとではないからである。しかし幸いにして、ヒトには、道徳に大きく関係する少なくとも3つの社会的傾向がある』³⁾ と言い、次の1、2、3をあげて「向社会的傾向」としている。教育ではこれらを利用すべきであると言っている。³⁾ 尚、モジュールとは、この場合、「おとなの知識へと発達をとげるための枠組みを提供する、生得的な学習装置」⁴⁾ である(カッコ内と下線部は引用者)。道徳(善悪の判断)については、社会によってこの枠組みが違うので、身近な大人が教えて納得させ、習慣的に行動できるようにさせなければならないと言うのである。

1. 子どもは共感する。1歳半になる頃には他者の痛みや苦しみがわかり、ほとんどの場合に、それを和らげようとする。
2. 子どもは教える。小さいときから、たがいに教え合おうとする。
3. 子どもは相互作用に価値を付与する。10か月齢頃から、ある人が他の人に対してする行為を見ると価値を付与し、なでるとか叩くとかいった自分への行為だけでなく、他者どうしの行為にもプラスやマイナスの値を与える。

上記1、2、3の下線部は母親を中心とした「養育者の責任部分」であり、プレマックは道徳には「モジュールはないから」教えるべきであると言っている。以上を図式化すると次のようになり、ニューマンが言う共感性の始まりは「学童前期：幼児～小2年」にあると納得できる。

<図式2「発達課題と人格的特性 (自己評価)」>

(学童前期：幼児-小2年) — (学習阻害は推測) —> (青年後期の自己評価)

- A: 共感性高い → 反対意見聴く・積極的学習活動・適応) → 理想実現の努力・思いやり高い
B: 共感性低い → 「反対意見聴く」低い・消極的 → (学習阻害) → 理想実現の努力・思いやり少ない

この図式の（「点線部分」は推測的ではあるが）好ましい集団は「共感性があり、罪悪感（良識・良心）」が形成されており、学習活動にも適応できて青年後期には理想実現に向けて努力をしてきた結果、価値の相対性を見出し協力（チームワーク）して社会に参加できる大きい可能性が見える。

どちらかと言えば好ましくない集団は、可能性は小さいとしても、共感性ゼロ、罪悪感ゼロの心の状態では、周囲のことを考慮することが少ない。また、自己中心的で、それ自体が学習阻害の原因となり、価値の相対性（人・立場などの状況・社会によって価値観が変わること）・協力する能力・協調性などが乏しい。以前のこの状況が今日まで影響していれば、職業適性の範囲が狭められてくるという図式である。

ニューマンの青年前期（13～17歳）の課題を改めて見ると、「役割要求（学生としての役割と友人としての役割など）の不一致の対処のバランスのととり方等を学び、美術・人文科学・社会のあり方などの知識が創造的概念を育むことを学ぶ。また、新たな解決法を生み出し現在の挑戦に当てはめる能力を持ち、問題解決への期待に対する圧力に対処し、集団や状況による価値の受容／拒否（価値の相対性）を学び、問題解決過程を客観的に見て自分の能力を考えながら対応することを学ぶ」などがある。この集団は、これらの課題を獲得しないと職業（選択）では種々のハードルのクリアが困難になる状況が予測できる。

調査対象の「どちらかと言えば好ましくない集団」は、学童前期には共感性が低く、それだけで学習阻害をもたらしている傾向はあったかもしれない。そのため、実習場面などでは価値の相対性・協調性もより低く、社会的に適応するレディネスの成熟に問題をかかえる傾向があると言えよう。

V. 結論

調査対象は現在青年後期にある。本論は、かれらの職業につく前のレディネスを把握するために、現在の人格的特性（自己評価）と、それ以前の青年前期までの家庭・学校・社会生活の要素との関係を探った。その結果、以下のことが明らかになった。

1. 学校生活では「歩行期（2～4歳）→学童中期（8～12歳）」の発達課題「自己抑制→勤勉性」に至る課題が「人の話に耳を傾ける」（協

調性）に大きく影響していた。

2. 人格的特性では「学童前期：（幼児（5歳）から小2年（7歳）」の発達課題である「共感性・道徳的判断など」が「反対意見を聴く・積極的学習活動」の適応に影響して「理想実現の努力・思いやりの獲得」に連動して大きく影響していた。

この結論の中核となる根拠は、歩行期（自己抑制）、学童前期（共感性・道徳律）・学童中期（勤勉性）の課題獲得にあり、それらを含む現在に至るまでの結果の集積と見ることが自然である。

「どちらかと言えば好ましくない集団」（13人）については、この根拠に沿った見方があるが、学校に来ないなどの不適応がない限り、人を思いやる優しい気持ち（共感性）が全くないとは言えないので、実際は「他人どころではなく自分のことで精一杯」の状況を示しているかもしれないという観点も付け加えたい。

（注1）この20項目は諸資料や文献を参照して作成し本調査で用いた。

（注2）この引用はBarbaral M. Newman and Philip R. Newman, *Development Through Life*(Third Edition), 1988、福富護訳『新版生涯発達心理学』川島書店（1997）が、Maslow, A.H.(*The father reaches of human nature*. New York, Viking, 1971)を引用した部分（p. 24）である。

引用文献

- 1) Barbaral M. Newman and Philip R. Newman, *Development Through Life*(Third Edition), 1988, 福富護訳『新版 生涯発達心理学』川島書店 1997, p. 236, p. 252
- 2) 山口創『子供の「脳」は肌にある』光文社, 2004, p. 88-89
- 3) David Premack and Ann Premack, *ORIGINAL INTELLIGENCE Unlocking the Mystery of Who We Are*, McGraw-Hill Companies, 2003. 長谷川寿一監修, 鈴木光太郎訳『心の発生と進化』チンパンジー, 赤ちゃん, ヒト, 新曜社, 2005, pp. 366-370
- 4) 同上, p. 21

参考文献

- 1) 辻功『教育調査法』誠文堂、1980

- 2) 片山義弘 (編), 上野加代子, 他『家族を考える本』福村出版, 1995
- 3) 宮本美沙子『やる気の心理学』創元社, 1995
- 4) 有地亨『家族は変わったか』ゆうひかく, 1997
- 5) AERA Mook, 「家族学のみかた。」朝日新聞社, Asahi Shimbun Extra Report & Analysis Special Number 39, 1998
- 6) 伊藤榮子『家庭を持つ看護師と母子関係の形成』医療文化社, 2002
- 7) 松本元『愛は脳を活性化する』岩波書店, 2003
- 8) Ron Clark, THE ESSENTIAL 55: An Award-Winning Educator's Rules for Discovering the Successful Student in Every Child, 亀井よし子訳『あたりまえだけどとても大切なこと』草思社, 2004

(表1) 15歳～17歳(中3～高2)頃の思い出しの調査(平成17年度)

*質問には差し支えない範囲で回答して下さい。		(該当する欄に○をつけて下さい)	
質問項目	質問項目	はい	いいえ
I 家庭生活の項目 (1-8)	1 朝食は家族で一緒に食べることは少なくなりました		
	2 特別な理由がある場合以外、学校に遅刻することは少なくなりました		
	3 母親に対する要求が少なくなりました		
	4 父親に対する不満が少なくなりました		
	5 将来は父(母)親とは違う生活(人生)の選択をしようと思つた		
	6 自分の行動はどちらかと言えば父に相談して決めた		
	7 自分の行動はどちらかと言えば母に相談して決めた		
	8 自分は家庭の人間関係や経済事情等を理解して行動した		
	9 家族は自分の意見をよく聞いてくれた		
	10 アルバイトは親の同意を得てからした		
	11 TVを見る時間が以前より減りました		
	12 自分の家では夫の門限はあった		
	13 家の門限は守ったほうである		
	14 好きなテレビなどを買ったが夜更かしすることは少なくなりました		
	15 時間の配分は自分でするようにしていた		
	16 自分自身の部屋は自分でするようにしていた		
	17 友だちのことはあまり親に話さなくなりました		
	18 言葉遣い等は、結果的に親を感動していたことが多い		
II 学校生活の項目 (1-6)	19 学校では楽しく話し合える友達がいっぱい		
	20 分らないことは先生によく聞きました		
	21 校則は守らなければならぬと思つた		
	22 周りを思いやって、自分の感情をできるだけ抑えた		
	23 スポーツや勉強で友達に認められたことが時々あった		
	24 スポーツ等で離れていても、それだけでは満足しなかつた		
	25 学校では自分のモデルにした先生や生徒がいっぱい		
	26 授業の質に向けて努力した		
	27 先生の教えはよく聞いたと思つた(影響を受けたと思つた)		
	28 放課後など友達と時々、勉強をした		
	29 難しい内容でも勉強には興味があった		
	30 苦手な科目は集中的に勉強した		
	31 勉強と遊びを区別する習慣ができていたと思つた		
	32 自分の進路決定には親(父・母)の意見を参考にした		
33 自分の進路決定には先生の意見を参考にした			
34 自分の進路決定には友人・知人の意見を参考にした			
35 近所の人たちへの挨拶は普通にした			
36 友達からは自分のために良い影響を受けたと思つた			
37 社会の決まりは守る方であった			
38 携帯電話(メール)を使用する時間が本を讀む時間より少なくなりました			
39 家の人との約束より友達との約束を重視した			
40 できるだけ友達と同じような服装(私服)をしたことが多かった			
41 自分の考えが正しいと思つた時は確信を持って主張した			
42 将来進む方向は大体決めていた			

(注) 上表中の「Ⅲ社会」は「社会生活の項目」の略。

<フエース(F)・シート>

(作成者 伊藤栄子)

- (1) 15歳～17歳(中3～高2)頃のあなたのあなたについて書いて下さい(又は○で囲む)。
 その頃の家族構成について教えて下さい。
 父、母、祖父、祖母、兄、弟、姉、妹、おじ、おば、その他()
 (2) その頃、家族の中であなたが特に好きな人がいたら、教えて下さい(単数回答)。
 父、母、祖父、祖母、兄、弟、姉、妹、おじ、おば、その他()
 (3) お家であなたのおお兄さんについて主として教えてくれた人は誰ですか。()
 (4) お家であなたのおお兄さんについて主として教えてくれた人は誰ですか。()
 (5) あなたの周りの人が遅い時はお家で主として誰が対応してくれましたか。()
 (6) その頃、あなたのお母さんとはどんな職業についていましたか、教えて下さい。
 (a. 会社員 b. 自営業 c. 公務員 d. 主婦 e. その他)

(2) 現在のあなたについて書いて下さい。

- (1) 現在()才 (2) 男・女 (○で囲む) (3) 出身()県
 (4) 現在のあなたの家族構成を教えてください(○で囲む)。
 祖父、祖母、父、兄、弟、姉、妹、おじ、おば、その他()
 (5) あなたのあなたのお父さん、お母さんについて教えてください。()内は複数回答で○で囲む。
 ① 父は、あなたの (a. 保護者 b. 健在 c. 会社員 d. 自営業 e. 公務員 f. その他)である。
 ② 母は、あなたの (a. 保護者 b. 健在 c. 会社員 d. 自営業 e. 公務員 f. その他)である。

現在のあなた自身についてのアンケート

現在のあなたに最も近い項目を7つ選びなさい(自己評価)。	(7項目に○をつける)
1 自分の理想を実現するために努力する	
2 社会一般の規範・倫理・道徳を守ろうとする	
3 自分の義務も果たし自己主張もする	
4 随分他家に配慮できる	
5 将来のことを十分考えて行動できる	
6 他人の反対意見を聞く余裕がある	
7 議論をする時は感情的になることが少ない	
8 他人を思いやる優しい気持ちがある	
9 好奇心が旺盛である	
10 体調不良の時は、自重する	
11 料理、洗濯、掃除などは進んで行う	
12 判断する時は直感に頼る場合が多い	
13 辛い時でも我慢することが多い	
14 感情は抑制してしまふ	
15 人に期待されることを懸命に努力する	
16 人前では遠慮して消極的になる	
17 欲しい物がどうしても手に入れないと思う	
18 前立ったり怒ったりする機会が多い	
19 他人や親の責任を強く追求める方である	
20 無意識に他人を厳しく批判する機会がある	

* IV 「人格的特性(20)」はアンケート実施時には記載されていない。